

関わり合う楽しさを感じ、主体的に遊ぶ子を目指して

子どもの思いを大切にした保育の実践（菜園活動を通して）

掛川市立すこやかこども園 園長 山 梨 規 子

1 研究目的

コロナ禍を経て人との関わり大切さを改めて見直した時、人との関わりが子どもたちの活動に大きな影響を与えていることに改めて気付いた。園内の様々な場面で人と関わる機会が増え、子どもたちは友達や年長児から得た学びや思いを自分の遊びに取り入れ、様々な遊びを展開しようとするようになった。同年代の人との関わりから得られる刺激は、子どもにとっては身近な良いモデルとなり、遊びの大きな原動力となる。「あんな風にやってみたい」という子どもの思いを保育者が捉え、それを実際にやってみることができるような環境を整えると、子どもは自然に環境に関わり、自分の思いを実現しようとしていた。関わりから学んだことを自分たちの遊びに生かすことで、活動がより豊かになっていくことを私たちは学ぶことができた。

そこで、人との関わりを、身近な存在から園内外へと広げていく時、子どもたちはどのような関わり方をし、自分の活動へ取り入れていくのかについて、大切に考え進めていきたいと考えた。主体的に遊ぶ子に育ててほしいと願う中、保育者主導の活動ありきものにならないよう、子どもたちの思いを大切にした保育に心掛け、人との関わり合いから得られることに焦点をあてながら、研究を進めていくこととした。

2 仮説

子どもの思いや気付きを大切にしながら、人的物的環境を整えることにより、子どもは主体的に物事に関わり、豊かな経験や学びが得られるようになるのではないかと。

3 視点

子どもの思いを大切にした様々な人との関わり工夫

4 研究実践

(1) 「大きな畑が欲しい」4歳児12月の実践より

本園が近所に借りていた大きな畑が持ち主に返却さ

れ、今までできていた菜園活動が行えなくなった。園庭の隅に作った小さな畑や花壇を使用したのが、その年の収穫量は少なく子どもたちに十分な体験をさせることができなかった。



昨年のじゃがいも
の収穫量

そこで地域に発信する通信に「小さな畑でもたくさん収穫するにはどうしたらよいか」というお助け文を掲載したところ、困っているなら畑を貸しても良いと言ってくれる方（加藤さん）が園に来てくれた。畑は園から離れた場所でありバスで行く必要があったが、子どもの経験には欠かせない良い体験ができる機会と捉え、貸していただくようお願いし、まずは職員に周知した。



借りることができた畑

同時期、年長児から小さな畑を譲り受けた後、数人の4歳児が、「少ししか採れないんだって」「家の畑は大きいからジャガイモたくさん採れるよ」「それなら大きな畑が必要だ」と話をしていた。それを聞いていた担任は、クラスにもどって皆に話をする中で、「大きな畑でジャガイモをたくさん採りたいなら、自分たちで園長先生にお願いしてみたら？」と伝えてみたところ、早速子どもたちが「園長先生、大きな畑が欲しい」と伝えに行っていた。



後日園長が「加藤さんとい 園長に早速伝えに来る子どもたちう方が、大きな畑を貸してくれることになったよ」と伝えると、子どもたちは歓声をあげ大喜びしていた。

➡この活動では、自分たちが思ったことや考えたことを、身近な人（今回は園長）に働きかければ何とかなることもある、ということを経験した。また、自分た

ちが考えたことを、自分たちで伝えに行った、という経験も、子どもの思いに沿ったものであり、主体性につながる活動とすることができた。畑借用のタイミングと、子どもの思いを上手につなげた担任の援助により、子どもたち主体の菜園活動をスタートさせることができた。

(2) 菜園活動「ジャガイモを植えるまで」

ジャガイモを植えることが決まったが、子どもたちは経験がないため次に何をすればよいか気付くことはできない。そこで担任は「準備万端かな？」と子どもたちに投げかける。すると「ジャガイモの種がない」「どんなのかな」という声があがり、中には家庭での経験から「種芋」をいうワードを出す子もいた。そこで子どもたちは早速図鑑を調べ始めた。それまでジャガイモの話に余り興味を示さなかったA児は、ジャガイモのページを一番に発見したことで、得意げな表情を見せた。子どもたちは再度図鑑を持って園長の所に向き「種芋が欲しい」「種じゃなくて種芋！」と自分たちで調べたことを自慢げに報告していた。

➡自分たちが頼んだことで始まった大きな畑の活動が、担任の援助により次へとつながっていった。ここでも自分たちで調べ、分かる過程を大切にすることで、子どもたちが自ら進めていく意欲につながっていた。

(3) 菜園活動「ジャガイモ植え付け」

植え付け前日、園長より種芋を渡され「出ている芽が取れないよう、大事にね」と伝えられる。例年であれば、職員が畑まで運び、畑で手渡ししていた種芋だが、子どもたちは自分たちで運ぶつもりで、自分のかごに芽が取れないようにそっと入れていた。



芽が取れないように大事に…



畑まで自分たちで運びます

植え付け当日、「加藤さんに畑貸してくれてありがとうって言いたい」「ジャガイモどうやって植えるか聞く」等、会話を弾ませながらバスに乗って畑に向かっていった子どもたち。待っていてくれた加藤さんに対し「ありがとう」「種芋持ってきたよ」と



図鑑を手にするA児



加藤さん

口々に伝え、その中には図鑑を持ったA児の姿もあった。「勉強してきたなんてすごいな」と加藤さんに褒めてもらった子どもたちはとても誇らしげに見えた。その後地域のボランティアさんの力を借りて「芽は大事」と言いながら、楽しく植え付けをすることができた。

<ここまでの考察>

「ジャガイモの植え付け」等、園の行事としてある程度決まっていることでも、子どもたちの思いや声に耳を傾け、子どもたちが自ら気付き、自分たちで思い立ち考えて決めたことを、実際に行動につなげられるような援助を心掛けたことにより、自分たち主導で進めているような感覚につながっていった。一部の子から始まった話題を、クラス全体へ「どうしようか」と投げ掛け、先生が決めるのではなく、みんなで考える、みんなで決めることを繰り返した結果、子どもたちの意欲につながることができた。また畑を貸してもらえた喜びが子どもたちの心にしっかりと残り、それが加藤さんへの感謝の思いへと自然につながっていた。

(4) 菜園活動「ジャガイモの収穫まで」

植え付け後、畑の場所が離れていたため、子どもたちは成長を見ることができなかった。そこで、動画を撮影して春休み期間中に家庭に配信して今の状況を伝えたり、年長進級後にはみんなで動画を見たりした。



そこでは草がたくさん生えていることや地面がひび割れていることに気付き「大変だ！草をとらないと、水を掛けないと」と言うことになり、畑に向くためのバスを手配して欲しいと園長をお願いに行くことになった。実際に出向いた草取りの日はあいにくの雨で畑の中には入れなかったが、畑に来てくれていた加藤さんを見付け、喜ぶ子どもたちの姿があり、親しみの気持ちを持っていることを感じた。また、加藤さんからジャガイモの収穫時期を教えてもらったことで、次への活動へとつなげることができた。



畑の様子を見に来た子どもたち

➡畑のことは自分たちで何とかしないと、という思いが、この頃にはかなり定着したように感じた。

(5) カレー会議

園に戻ってから、収穫したジャガイモはどうするか、

について話す機会があり、「フライドポテト」「ポテトサラダ」等いろいろな意見が出ていた。そこでみんなで話し合うことにし、結果カレーを作ることに決定したが、作り方について子どもたちから「どうやって作るのかな」「ジャガイモの他には何が欲しいのかな」等たくさん疑問の声があがった。保育者が「どうしようか」と投げかけると、「給食の先生なら知ってるはず」「お母さんに聞いてみる」等のアイデアが出された。

その後、子どもの声掛けにより、家庭から作り方のレシピがいくつも届けられた。

また、給食の先生に作り方を聞く日を「カレー会議」と命名し、聞きたいことを全部聞く会として、子どもたちの疑問を一つずつ質問していくことにした。給食の先生から、聞きたいことがあれば、いつでも給食室をノックしてね」と言われ、翌日からドアをノックして話をする姿も見られた。

2回目の会議では切り方について給食の先生に質問し、「包丁を持たない手は猫の手にするんだよ」「野菜の大きさはこの位だよ」と実際に使う鍋や包丁を見せてもらった他、前日にやっておくことも話してもらい、カレーを作る手順を子どもたちなりにイメージすることができた。「ジャガイモは30個必要だよ」等、収穫の目標や、前日の準備のことまで子どもたちは何をすればよいか、よく理解することができていた。また、カレーに何肉を入れるのか、いろんな先生にインタビューし、シールを貼ってもらって多数決のようなことをする姿もあった。

➡この話し合いでは、分からないことを誰に聞けばいいのか、子どもたち自ら考え、気付き、実践していったことが大きな成長であると感じた。また、子どもが家庭に発信したことが、家庭のレシピとして園に返された。園の活動や子どもの思いが家庭に伝わる良い機会とすることができた。

(6) 収穫

「絶対に30個掘ってこよう！」「カレー作り楽しみ」と目的をもって畑に出掛けて行った。実際に掘り始めると、土の中からゴロゴロと大小様々なジャガイモが

顔を出し、子どもたちは目を輝かせて張り切って収穫を楽しむことができた。畑のボランティアさんにも「見て」「ここ手伝って」等、声を掛けたり助けてもらったり等、話をしながら関わることができていた。

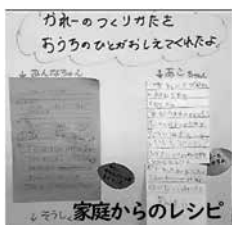


収穫したジャガイモは30個どころか500キロ。大きな畑での収穫体験は、大満足のものとなり、次への活動への期待につながった。



(7) カレーパーティーに向けて

カレー作りの準備が進められる中、子どもたちから「加藤さんやボランティアさんにも食べてもらいたい」という声があがる。そこで3回目のカレー会議を行い、みんなで力を合わせて取り組む楽しさを感じられるようにしたいと考えた。会議の中で「招待状を渡したい」「部屋の飾りを作りたい」「手紙を書きたい」「机と椅子を運ばないと」「ありがとうと歌のプレゼントをしたい」等の声があがり、必要な材料を準備すると、思い思いの飾りやメッセージをどんどん作り始め、それを会場に飾っていった。パーティー当日には机と椅子のセッティングも行い、みんなで楽しいパーティーを開こうと積極的に取り組み、手作りのステキな会場が出来上がった。



カレー会議1回目



カレー会議2回目



思い思いに作り始める姿

前日の野菜の準備では、玉ねぎの皮をむいたり野菜を洗ったりして給食室に届けた。当日は包丁を使って野菜を切り、鍋で煮込むまでを子どもたちと行った。園中に広がるカレーの匂いに誘われて年少児や年中児、乳児クラスの子どもたちが入れ替わり作っているところを見に来て「年長さんってすごいね」と言葉を掛けてくれ、年中児の中には憧れの気持ちを抱いた子もいた。自分たちが考えたり教えてもらって



招待状を届けました



様子を見に来た3歳児

やってみたりしたことが、出来上がっていく過程を体験することができた。

カレーが完成したところで、加藤さんとボランティアさんを招き入れ、席に案内し、**ボランティアさんと一緒に食事**カレーパーティーがスタート。一緒に食べた後には、インタビューをし、「今までで一番おいしいカレーだったよ」と言われ大喜びの子どもたち。その後お礼の手紙やプレゼントを渡し、みんなでお礼の歌を歌い、最後に握手をしてパーティーは終了。畑を借りるところから始まった、子どもたちが描いた5カ月にもわたるストーリーを大成功で終えることができた。



その後も地域のボランティアさんは、花壇の植え付けや寄せ植えづくり、焼き芋会など事あるごとに園に出向いてくれ、そのたびに子どもたちから「この間はありがとう」と自然に言葉を掛け、関わっている姿が見られるようになった。



ボランティアさんと寄せ植え作り

5 成果と課題

- ジャガイモ植え、収穫した野菜を使ってのカレー作りは、今までも行ってきた活動である。毎年行う活動であるがゆえに、当たり前に行ってきたが、今回子どもたちに一つずつ「どうしようか」「どうしたい？」と投げ掛け、共に考え、子どもたちの思いを尊重しながら丁寧に進めることを意識して取り組んできたが、これほどまでに主体的な活動につながるとは思わなかった。
- 動画の活用、家庭への発信、カレー会議、活動の振り返り等、様々な角度から活動を進めてきたことで、子どもたちの思いが途切れず、充実した活動を展開することができた。自ら主体的に動けるように活動を展開してきたからこそ、4歳児の2月からクラス編成を経た5歳児の6月まで、気持ちをつなぐことができたと考える。保育者がその時々の子どもの思いに気付き、適切な援助を継続することの大切さを改めて学んだ。
- 今回の関わりは、まずは身近な園長から始まったが、食べ物のことは給食の先生、畑のことは加藤さん等、

この人に聞けば教えてもらえる、助けてもらえるという経験の積み重ねにより、子どもたちの活動の幅を広げることができた。

- 地域の人との関わりについては、活動の在り方や進め方により、互いに親しみを感じ、思い合う様子が見られるようになり、心の成長を感じることができた。子どもたちが必要な関わりであると感じて取り組んだことにより、親しみや感謝の気持ちが自然に育っていくことが分かった。
- 今後も、毎年やっている活動だからではなく、この活動が子どもたちにとってどのような学びや経験が得られるのか、そのために必要な環境や関わりはどのようなものか、常に意識し保育を進め、心と身体成長に繋げていきたい。

6 終わりに

主体的に活動に取り組む子どもとは、どのような姿をいうのか、園内で何度も話し合いをしてきた。今回の研究では子どもの思いを大切にしながら様々な人との関わり工夫に視点をおき、子どもたちの関わる姿や気持ちの変化を探ってきた。主体的な活動であるためには、子どもたちがやってみたいと思える活動であること、自分たちで「どうしよう」「こうすればどう?」「こうしたい」という思いや考えを積み重ねながら進められる活動であること、自分たちでやり遂げた満足感と達成感を味わえる内容となること等が大切である。

現在、前年度の5歳児の姿を見て育った今年の5歳児が、早速この活動を引き継いで実践に繋げている。昨年度の5歳児は、「畑のことは加藤さんに聞けばいいよ」という言葉を伝え、それを受けた今年の5歳児は、「去年の年長さんがやってたよね」「加藤さんに聞いてみよう」等と意欲的に活動を進めており、主体性が引き継がれた姿からも、昨年度の成果を強く感じることができている。

今後もこの研究を継続し、すこやかこども園の子どもたちが今まで以上に心豊かに、たくましく、充実した園生活を送れるように、努力していきたい。

